

より良く生きる——出居清太郎先生の世界—— 第18回

山本博也

(1)見せられるのは、見せていただいている

辛い、苦しい、耐え難いことを、なぜ見せられるのか、聞かされるのか——それは見せていただくのであり、聞かせていただくのであって、そこに深い神の思し召しがあると悟るとき、私は神慮と合一し、神と合掌の姿になっておりますから、そこには不滅の徳と力と愛とが宿されます。

(出居清太郎先生の言葉から)

ロシアのウクライナ侵攻による戦争が2年近く続く中、パレスチナではハマスとイスラエル軍との戦闘が始まりました。私たち日本人は連日、遠く離れた地域における破壊された街の姿や、悲惨な状況にある人々の様子を、見せられ、聞かされていきます。暗たんたる思いで、一日も早い平和を願うばかりです。

いま、「見せられ、聞かされ」ていると言いましたが、そのことを通して、私たちが自身のことを反省することは、私たちがとってたいへん有益なことであり、したがってそれは「見せていただく」いた、「聞かせていただく」いたということにな

ります。

先生は昭和39年(1964)に、当時の日本と世界の状況、人心をご覧になって、日本および世界の人々に、次の3点についての猛省を促されました。

- ①勝手きまま ②我執貪欲 ③人命軽視

この3点は、それから半世紀以上経った現今の日本と世界の世相にそのまま、いやむしろより強くあてはまるのではないでしようか。

(2) 世界平和はわが言語動作にある

私は悠久世界平和を唱えているが、世界の平和はわが心にある、わが言語動作にある。平和、平和と言うのみ(湯呑み)では茶飲み話と言ってよい。一人一人が人格完成に向かって実行していくこと

が大切である。

(出居清太郎先生の言葉から) 先生は、平和にしる戦争にしる、その大本は人々の心のあり方であり、日ごろの言語動作にあると喝破されました。

前述の先生の猛省の促しは、『みなをし』と題する小冊子として出版されましたが、その中で先生は、反省に基づき実践すべき具体策を3つ挙げておられます。

- ① みなおし || 振り返る || 振り替え：
「神国」 日本を「真国」 日本に振り



エナガ 大西 恵

替えて建設する、そのように欠点のあるものを、より適切なものに転換すること。

② みなおし〓身なおし：鏡を見て身づくろいをするように、他人の言動、世の動きを鏡として、自己の言語動作を美しく整えること。

③ みなおし〓皆押し：皆で協力・融和して平和な世界を押し上げること。先生は、「平和は作られるものではない。生み出されるものだ」とおっしゃり、「一人一人の心から我執、貪欲、嫉妬、怒り、恨みが消え去ってゆけば、おのずから物心ともに健全に恵まれた、平和な世界が現れてくる」とおっしゃっています。

そして先生は、毎日、正午に〈平和のいのり〉を行うことを提唱されています。

「〈平和の祈り〉は、ご神前に集まって行う行事だけではありません。各人が、その時刻にいるその場でできるのです。身と心を合掌させて、心に平和を祈ることでもよいのです。毎日、どこであろうと、この行いをせよと申しておりますが、皆さんはいかがでありましょうか」と。

毎日正午、あ、そうだと思い出し、平和に思いをこめる。その時一瞬でも、怒り、恨み、我執、貪欲から解放される。そのことが積み重なればそれは心のやすらぎと愛と希望へとつながるのではないのでしょうか。その心の平和が社会と世界の平和を生み出す礎なのではないでしょうか。

過去の実話を2つ紹介します。

（その1）昭和20年、太平洋戦争の終

末期、東京も空襲に見舞われました。先生は、敵機に向かって合掌され、ご苦労さまと言いなさいと指導されました。当時45歳の先生と15歳の少年が防空壕の中で交わした対話です。

少年 敵の飛行機にご苦労さまなんて、どうして言わなくてはいけませんか。私の家も焼かれたし、日本中がああ爆撃で生命も財産もなくしています。ご苦労さまなんて言うのはおかしいじゃありませんか。

先生 生命・財産を奪うのは戦争です。今頭の上に飛んできたアメリカ人の飛行士が、あなたの家を焼こうと思っているわけではない。憎むべきは戦争です。この戦争などで命を落とすたくない。それには、敵を憎まず、ご苦労さまという言葉

葉で迎えることだ。

(その2) 広島に原爆を投下したアメリカの爆撃機の副操縦士だった人は、「我々はなんてことをしたのか」と搭乗日記に記したと、後年涙を流しながら告白した。

最後に遠い未来の夢物語を一つ。

日本人Aさん、米国人Bさん、中国人Cさんは日本の同じ大学で学んだ仲良しで、3人で神里で合宿したこともありました。やがて世界が危機的状況に陥った時、母国の指導者となった3人は、日本で会談することになり、Aさんは会談場所に神里を選びました。そしてこの会談は、「世界を救った神里会談」として人々に記憶されることになりました。

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1
修養団捧誠会 <https://www.hoseikai.or.jp>